

華北農村の民俗宗教 ——河北省唐庄村とその周辺の「行好」を中心として——

歴史民俗資料学 歴史民俗資料学専攻

201970177 王 海翠

【論文要旨】

「行好」は、中国の華北地域で広く実践されている宗教活動である。中国史の様々な時代において、この宗教活動は政策によって活発であったり、隠されていたりした。21世紀の現在、グローバル化と文化復興に伴い、中国は文化ソフトパワーをますます重視している。中国には仏教、道教、イスラム教、カトリック、プロテスタントの5つの宗教がある。中国にはこれら5つの宗教以外の宗教も存在する。5つの宗教以外の宗教については、どのように活動を行い、信仰を構築しているかが問題になっており、民間信仰、民間宗教、民俗信仰、民俗宗教、生活宗教、大衆宗教などの概念が出されており、漠然や一定の混乱を呈している。

このような状況を踏まえ、本論文では、華北地域の河北省の4つの村落を調査し、人々の日常生活における「行好」の実態、地域社会の人々にとっての「行好」の意味、宗教職能者である「香頭」による「行好」の実践状況、地域社会における「行好圏」という4つの側面から、民俗宗教を調査研究することを目的とした。研究方法の第一は文献研究法である。先行研究を踏まえた上での図書館、人々の口承經典から情報を収集・分析することである。第二は、「行好」の宗教活動を現地調査で明らかにすることであった。最後に、地元の民俗語彙を整理・分析することである。

本論文は、序章、終章を含む7章から構成されている。

序章

第1章 調査地の概要

第2章 唐庄村及び周辺の民俗宗教活動:「行好」

第3章 唐庄村及びその周辺を含む「行好圏」

第4章 「香頭」と「看香」

第5章 「行好」における「上供」

終章

序章は研究背景と目的であり、先行研究及び問題点の整理に基づいて研究方法と論文の構成を記述した。

第1章では、唐庄村を中心にし、李庄村、武高庄村、前寧堡村を比較対象にして、唐庄村の地

理と人口、生業、周辺の村(李庄村、武高庄村、前寧堡村など)との関係、唐庄村の統治、生活文化、民家の宗教空間について述べる。華北地域の縮図としての唐庄村の全体的な状況を明らかにした。

第2章では、唐庄村および周辺の村で行われる民俗宗教活動である「行好」について詳細に記述した。まず、「行好」の定義が明確にされて、広義では善行を行うことを指し、狭義では神仏と関連する宗教活動を指す。狭義の「行好」を中心に、「行好」を3つの次元で検討した。三つの次元とは、個人が家庭で行う「行好」活動、村の廟で行われる宗教活動への参加、山への巡礼での集団的な「行好」活動である。第二に、「行好」における「神譜」の「開光」活動と、経典の内容に反映された「行好」を中心に論じた。最後に、より神仏に近づく活動である「安卓」の儀式の過程を考察した。「安卓」と「行好」、および「香頭」との関係についても分析した。

第3章では、唐庄村とその周辺の宗教施設について述べる。「行好」の人々の家や、村の廟で祀られている複数の神仏について明らかにした。同時に、村には廟だけでなく、祠や毛主席記念堂もある。毛主席記念堂での「行好」の仕方も、焼香と拝礼である。村と村の間の「行好」の方法は、廟会に参加することである。個人で廟会に行く人もいれば、弟子を組織して廟会に行かせる「香頭」もいる。廟会は、線香を焚いて神仏を拝むだけでなく、売買や取引、演劇を楽しむ場でもある。近隣の村々の廟会に参加するだけでなく、人々は近くにある霊山、すなわち「四山九頂」の廟会にも巡礼に行く。以上のような「行好」の人々の実践する活動を理解するためには、「祭祀圏」と「信仰圏」の概念を援用・検討し、華北地域の信仰・宗教活動の特徴を理解しようとしたが、「祭祀圏」と「信仰圏」の概念を整理・分析した結果、第一に、「祭祀圏」は村落共同体の義務性を強調し、強制的な性格を持つ。「信仰圏」は自発性を強調する。「行好圏」は「信仰圏」と同様に自発的である。第二に、「祭祀圏」は複数の神仏を信仰しているが、主神はいる。「信仰圏」は一つの神仏への信仰を強調する。この点で、「行好圏」は多神教の特徴を持っており、主神がいると同時に配神もいる。第三に、「祭祀圏」は祝祭性を強調し、「信仰圏」は非祝祭性を強調する。この点で、「行好圏」は祝祭性と非祝祭性の両面を持つ。第四に、地理的範囲という点では、「祭祀圏」が郷・鎮のレベルで最大の範囲を持っている。「信仰圏」の範囲は「祭祀圏」よりも広いと強調する。この点で、「行好圏」の最も小さな範囲は家庭であり、家族の一人が家族全体に代わって善行を行う傾向もあり、個人が実践する「行好圏」の地理的範囲は、小さい場合もあれば、非常に大きい場合もある。集団・グループが実践する「行好圏」の最小範囲は、村の廟で行われる宗教活動に参加することであり、廟の所属する村と周辺の隣村に限るのは普通である。その最大範囲はいわゆる「四山九頂」であり、すなわち明らかに地元の郷・鎮の範囲を超えており、近隣の県外のみならず、近くの都市にまで及ぶ。両概念が存在するにもかかわらず、どちらも華北地域の農村における「行好」活動を完全に説明しきれないので、筆者は「行好圏」の概念を提案し、その概念を論じるとともに、「行好圏」の特徴を記すことを試みた。

第4章は、「行好」活動における重要な役割を果たしている宗教職能者である「香頭」について考察したものである。「香頭」についての定義と分類について説明した。調査地域の「香頭」には、「看病看事」を行わない「香頭」と、「看病看事」を行う「香頭」の2種類がいる。この2種類の「香頭」

の大きな違いは、神仏と交信する能力があるかどうかだと説明されている。筆者は特に「看病看事」を行う「香頭」に焦点を当てて調査を行い、その内部組織が師弟関係であること、また、師匠である「香頭」が行う「開光」、神仏の誕生日、または師匠である「香頭」の誕生日などの宗教的な行事に参加しなければならないことを明らかにした。弟子が宗教行事に参加する目的は、「看香」を学ぶことに加え、師匠と弟子の関係を維持することにある。ここでは、「香頭」は、「看香」儀式を通じて、依頼者の悩みを解決するために、「看病」、「浄宅」、「解鎖」などの儀式が取り上げられた。続いて、「看香」とは何か、「看香」することできる3つの成巫プロセスと、「看香」の具体的な方法について書かれていた。

第5章では、当地の人々が「行好」を実践する最も一般的な方法の一つは、集中的に旧暦12月と1月に行われる「上供」の活動である。本章は「上供」を調査したものである。「上供」の定義などを整理したうえで、必要な供え物の種類、日常の供え物と非日常の供え物の違い、供物の食べ方、供物の供える場所などを記述した。旧暦12月と1月には「上供」の儀式が特に頻繁に行われ、その中、主に12月23日には竈神を祭る儀式、12月28日には「上平安供」、そして1月25日には倉神を祭る宗教行事を調査した。現在においても竈神は、玉皇大帝を代表して人間界を巡視する機能をまだ持っていることを考察し、人々は竈神を家族の保護神として位置付けている。「上平安供」は地元の人々にとって年間で最も重要な祭りであり、ほとんどの家庭で儀式が行われる。その中、最も目を引く供物は豚頭で、神仏や祖先に豚頭を供えることは親孝行と神仏への敬意を表すことを意味している。この地方の人々の考え方として、「上平安供」には強い孝行の観念が込められていると考えられる。また、当地の人々にとって、倉神を祀ることは、豊作を祈ることでもある。

終章では、これまで中国における宗教研究の視点として重要性が指摘されながら、具体的・実証的に検討されることが少なかった「行好」について、それを道徳や規範の問題ではなく明確に宗教現象として位置づけ研究対象化した。また、「行好」を考察するとき、1. 日常生活における「行好」の実態を把握すること、2. 地域社会に「行好圏」を意識すること、3. 宗教職能者による「行好」を把握すること、4. 地域社会の人びとにとって「行好」がいかなる意味を持っているか把握すること、という4つの分析視点を提示し多角的に検討した。ここでの中国の地域社会の範囲をより明確に説明するために、周星(2011)は「文化遺産と『地域社会』」で、「通婚圏」、「祭祀圏」、および「集贸市场圏」は必ずしも重なるわけではないが、ある「地方」の閉鎖性と流動性を反映することができ、それらが大まかに規定する「地方」はある「地域社会」に相当する」を引用して考察した。

そして、学術界の祭祀圏の理論と信仰圏の理論に触発され、筆者は、民間信仰や民俗宗教の信仰活動の地理的な範囲に注目したが、筆者が提案する「行好圏」は祭祀圏や信仰圏とは異なる。祭祀圏は村の共同体の背景に影響を受けており、ある程度強制的であり、信仰圏は地域社会内の特定の廟が崇拝する主神を中心に、その主神を信仰する信者が分布または活動する範囲を指す。筆者が提唱する「行好圏」は個人を中心に構築されており、一般的な善行を行う人々や「香頭」の個人も含まれる。個人の「行好圏」は地理的から、自分の家から「香頭」の家、そして村の廟または近隣の村の廟、さらに遠くの「四山九頂」にまで広がる。このように見ると、確かに空間的な範囲が存在する。この「行好圏」は特定の神仏を中心に置いておらず、強制力もない。これは完全に村

の個人または多くの個人の善行の実践のサークルであり、相互に重複する部分があるかもしれないが、完全に重複することはない。これが「行好圏」が多重性を持つ要因となる。また、個人の精神または信仰の生活から見て、どこに行くか、どの神仏を拝むかはほぼ相対的に自由である。主観的に想像される「行好圏」の範囲はさらに広いかもしれない。しかし、個人の実践または「行善者」の小さなグループの実践が距離によって段階的に異なることが示される。個人または「行善者」の小さなグループの「行好圏」への影響要因は、日常生活の人間関係と、崇拝されている神仏が「行善者」の心の中で拝む神仏が靈驗あらたかかどうかである。